会を持続させるために一体として捉えなければならないのではないか。それぞれのテーマを融合させることによって、真の意味での価値観が見出せるのではないか。そしてそのネットワークを個人のものにするだけでなく、全体として一つに共有化し、広く一般化できないか。
　美海と弘章にとって、途方もない構想を伝えるものもあった。しかし、そんな夢物語に腰が引けながらも、新しく開ける世界に魅せられていることも確かだ。何よりも、各地でそれぞれのアイデンティティを生かしながら、地道に、そして豊かに生きている人たちの存在に、希望の光を感じる。

　一方で美海と弘章は、敦士との関わりを模索しはじめた。渚との話題に出たことが発端だ。それまでも気にはしていたが、その話題は敢えて避けてきた。しかし、高校卒業も視野に入り、この島を出ることが現実味を帯びてきた今、途絶えた関係をそのままにしておくわけにもいかない。
　かといって、学校でいる間に二人が話すことはなかった。不思議と学校でいる間は、意識しながらも距離を置き、不自然に振る舞うことが多い。いつもの調子に戻るのは、帰りが同じフェリーになり、しばらくたってからが定番だった。
　その日の帰りも、同じフェリーになった。まわりには近所の知り合いもいれば、他学年の後輩もいた。放課後補習が終わってからの帰りで、早い時間というわけではなかったが、部活を引退する前の遅い時間というわけでもなかった。甲板デッキの手すりに寄りかかり、低く垂れ込めた雲の隙間に覗く夕陽を眺めていた。
「なあ、あれからあっくんと連絡とった？」
「いや、とってない」
　分かりきったことを訊いた気がした。
「何か訊いたりせんの？」
　弘章を責めるつもりはないが、ついそういう口調になる。
「……美海はどんなん」
「うん、……それは、私も分からん」
　逆に切り替えされた美海も、そう答えるしかない。どんよりとした空の雲そのものだ。
「あいつＬＩＮＥもやらんしな」

努めて明るく言う弘章に、美海が提案を持ち出す。
「今度、家に行ってみる？」
「家か……」
数年前に思いを馳せる。いま以上に男女を意識しなかった時代。まだみんな子どもだった頃。他学年の友達もいたが、なぜか三人で過ごすことが多かった。組み合わせが良かったのだろう。お調子者でいつもふざけてばかりの弘章、男勝りで正義感が強い仕切り役の美海、おとなしい割にしっかり者でどこかクールな敦士。キャラがまったく違っていたにも関わらず、なぜか気は合っていたし、何かするときはいつも一緒にいた。キャラが違うことが幸いしたのかもしれない。
「家に行くんやこ中学の時以来やなぁ」
「ようしたもんな、ゲーム」
「あの時はよう集まってしたなー」
胸の奥にあたたかい灯がともる。砂浜で遊んだこと、山を駆け登ったこと、夏祭りや学校の帰り道、それぞれのなかに、それぞれの場面がよみがえる。いま思い出しても、大切な思い出に違いはない。

七月、学校が期末テストで半日のため、美海と弘章は申し合わせて敦士の家を訪ねることにした。美海と同じ地区とはいっても、そこは少し離れた場所にある。たまたまその時は雨も上がっていたが、いつ泣き出してもおかしくない、梅雨末期の空だった。
玄関の呼鈴を押す。しばらく待つが応答がない。昔と変わらないなと、目を合わせる。弘章が躊躇なく、ガチャリと玄関扉を開ける。
「敦士、おる？」
奥の方で物音がする。しばらくして敦士が姿を現す。
「おう、久しぶり。どしたん、急に」
「お前こそ何しょん」
互いに笑いかける。弘章の後ろに美海を見つけ、何かを察知したように付け加える。
「上がれや」
失礼します、と誰にともなく言いながら、こぢんまりした敦士の部屋に上がり込んだ。

「部屋、昔と変わっとらんな」
「そこら辺に適当に座って」
　何か飲む？と言い、弘章が、持ってるからいい、と答える。
　ゲームでもする？と言い、美海が、いい、と答える。
「あっくん、学校どうするん？」
「ああ、うん……」
　痛いところを直球で突く。
　勉強机のいすに座る向こう側の本棚には、教科書やら参考書が整然と並んでいる。ぞんざいに扱われていないことがよく分かる。そのうえ、学校では使わないような科学雑誌や専門書のようなものまでがあり、昔と変わらないな、と美海は思う。
　小学生のときから敦士は、虫やら気象やら天体やらに、やたらと興味を示していた。そのことが気にかかると、美海も弘章もそっちのけで、独りでも立ち止まって観察し、考え込んでいた。そんな頃を思い出し、美海は少し嬉しい気持ちになった。見上げた敦士の向こう側の壁に、天体などのポスターが目に映る。
「あっくん、卒業したらどうするん？」
「いや、別に」
「別にいうて……」
　沈黙が、少し流れる。
「俺はな、県外の大学に行こうと思とる」
「私もなんやけど」
　弘章に続けて美海が言った言葉に敦士が応えた。
「で、どうするん？」
「どうするんて……先のことやん、まだ分からんわ」
　ばつが悪そうに答える弘章に、敦士が失笑する。それは、先のことまで考えずに進路を考えていることに対する嘲りのような冷ややかな笑いだった。
「私はな、大学行って、環境のこと勉強しようと思う」
　この数ヶ月受けてきた渚の影響だ。
「ふーん、なんで？」
　食いついた敦士に美海が、渚から聞きかじったことを話しはじめる。
「あっくん、ＳＤＧｓいうて知っとる？」

「うん、まあ」
「今な、地球は大変なことになっとるん。二酸化炭素が増えて地球温暖化で異常気象が起きて、自然災害もすごいやろ。それに、私らが出すプラスチックゴミや自然破壊で他の種が絶滅しかけて、生態系のバランスも壊れとって。このままじゃ人類自体がもたんていうか、死滅するかもしれんやん。そやから今までみたいな大量生産、大量廃棄やったり、エネルギーの無駄遣いやなくて、今の生態系が持続できるような生活スタイルに変わっていかんといかんの」
「へえー、美海、よう知っとるやん」
　感心しながらも、やはり少しだけ冷たく笑った。
「みんな渚さんの受け売りやけど」
「渚？」
「あー、知り合いの大学生」
「ふーん」
　敦士にも思うところがあるようで、何か言いたげな雰囲気が二人に伝わる。敦士の言葉を待つ。
「環境問題やん、馬鹿げとるわ」
「えっ」
　唐突な否定の言葉に、その真意を知りたくて敦士の目を見つめる。
「環境問題みたいな小さいことで。この国も、この星も、いつか消えていくんやで、分かっとる？この家も、この島も、全部なしなるんやで」
「あっくん、何言いいよん」
　それは美海には聞きたくない言葉で、まるで今の自分が全否定されているように思えた。
「そもそも、人類は絶対に滅びるんや。いやその前に、この地球自体、四十億年もしたら表面温度が上がって溶けて、地球上の生命はみーんな絶滅するんや。七十五億年もしたら太陽は赤色巨星になって、今の地球軌道を超えるくらい膨張して、地球は太陽に飲み込まれて、消えてなしなる。
　知っとん？この五億年の間にも地球は大規模な大量絶滅を五回も繰り替えしてるんやで。一番最近の五回目の大量絶滅は六六〇〇万年前。巨大隕石の衝突が原因いうて言われとるけど、ほかにも地球規模の火山噴火や、スノーボールアイスっていう地球